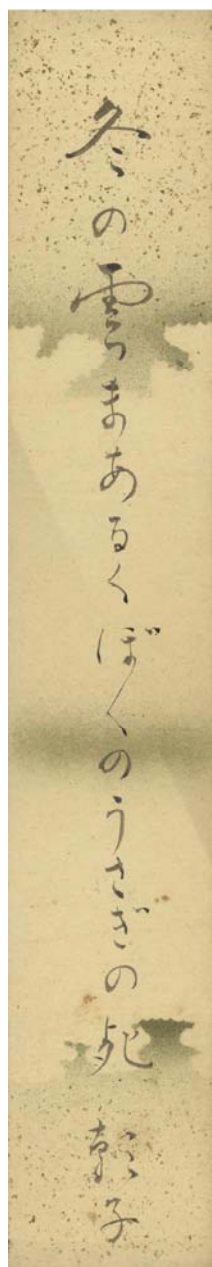


あを 11

2008





冬の雲まあるくぼくのうさぎの死

長谷部朝子

あを

十 一 月



食卓

本三宮前

佐藤喜孝

原子爐の中で芽を出す水中花
八月が澤山ありぬまだなかば
暗いのか明るすぎるのか夜店
夏をはる人形焼に餡すこし
金蠅のながくとどまる曼珠沙華

薄もみぢ

浦和

竹内弘子

夫といふ不思議なるひと暮の秋
タバスコの蓋のころがる薄もみぢ
蓋物の紫蘇の実漬をプツと噛む
さうめんや二階へ声をかけてくる
霧雨や遠にとよもすサツカー場

衣被

テーブル掛け替へて身ほとり秋にする
白ふきん掛け大笹の衣被
衣被世の少子化をとどめたし
秋祭少年に髭生えそめし
集りて大方は寡婦酔芙蓉

田端 田中藤穂

胡蜂

刺されしか噛みつかれしか胡蜂
新酒古酒夫の秘蔵は蜂焼酎
秋の蜂は気が立つてるぞ土地の人
蜂の子が美しいと信州人
人間が一番怖い胡蜂

白金 東亜未

変 動

マンホール湧き水のごと秋出水
舗装路の小川となりし秋出水
秋出水土手の草花蓬けたり
赤とんぼ出水のあとに戻りけり
秋葦簀午後の日差の縞模様

四日市

長崎桂子

朝顔や上昇志向木をのぼる
コンバイン稲の香りを残しをり
土手道の小さき踏切曼珠沙華
夕焼のさびしくなりぬ吾亦紅
分け入りて意外と深き芒原

さいたま

早崎泰江

棺桶に手を掛け金木犀のみち
灯台やつひ還らざる赤とんぼ
姥捨秋はても老人会のバス
秋終るいよいよ恋のあきらかに
身辺りを白布白紙に十一月

新宿 堀内一郎

曼珠沙華

信濃路の曼珠沙華また彼岸花
曖昧な記憶でたどる曼珠沙華
不揃ひの羅漢竝びぬ菊日和
小さき旅ズボンに止まる小蠋螂
秋の色深まりて行く九十九折

新宿 森山のりこ

秋霖やそここうねる石畳
大花野少年ひとり風を待つ
軒低く古りし居酒屋秋刀魚鮓
寝転んで少し近づく星月夜
古里のくりんくりんな栗ぎっしり

上高田 森理和

愛宕山

女坂通り抜けたる竹の春
回遊の鯉鮮やかに落葉船
椎の実の鬱蒼として男坂
葉隠れに時をり見えて菊の花
秋空に白雲が飛ぶ愛宕山

本三西 吉成美代子

本三宮前

吉弘恭子

短夜の猫に腕を貸す一時
露けしや朧濡れてゐるやうな
ながれる時間蓮のひらく時
夕焼のなかほどに坐る少年
少年に凭れ電車の熟寝かな

秋の雲

鹿手袋

渡邊友七

虫鳴いて障子隅まで蒼き夜ぞ
水引草胸にひとすぢ日の走る
寺出づと峽の秋日を身にあつむ
秋の雲子雲を連れて地の秀指す
萩むらやはげまざる日の水明るし

大山千枚田

清瀬 赤座典子

雷過ぎて幽き秋の来たりけり
蕎麦の花洗濯日和と予報官
初秋刀魚鮓屋の背の丸くなり
紅一点棚田の畦の曼珠沙華
濡れそぼつ藁塚の早色失せる

野辺送り故人も聞ゆ秋の音
トランペット秋の河原を寂かにす
束の間の巡り会へたか秋の蟬
あやとりの出来たとにつこり赤まんま
冬瓜の四つ割にされ店先に

桜ヶ丘 安部里子

諍ひに言葉還らず枯葉踏む
くくられし旧家の萩や鬼瓦
声聞けば姿も見たし虫の会
かなかなや疎開の村に道の駅
言訳はしないときめて空は秋

向島 遠藤 実

秋扇親しき人は遠くゐて
吾亦紅人知れずいま花になる
青空をくつきり切つて曼珠沙華
樹下の椅子日差しは秋に移りけり
椋鳥をすべて収めて大樹なる

逗子 鎌倉喜久恵

茹で上げて芋名月の衣被
横笛も琴も平家や今日の月
狸より狐に逢はむ良夜かな
まんじゅしやげ或日突然曼珠沙華
夏草の無法地帯となる更地

川崎

木村茂登子

竹竿で柿採る老夫ローカル線
畦面で頭たれたる稲穂かな
嫁終へて母と語らふ夜長かな
おもむろに傘さしてあり月下美人
月下美人きつと今夜よと電話

白金

斉藤裕子

銀座 篠田純子

九月くる粥一膳の力かな
観音とマリアと在す草の花
さやけしや介護の粥と離乳食
秋扇いつも会議で少数派
秋風やねんきん特別便来る

千駄木 芝 尚子

蟬しぐれなかのひとつにわが耳鳴り
水澄みて青空は今無一物
かまきりにをがまれてゐて近よれず
まんまるの月のかなしみふところに
ふかぶかと秋空沈めにはたづみ

敬老の日

宝泉寺前

芝宮須磨子

うれしさは孫の数だけ敬老日
黒猫が斜にかまへて秋の雨
ゴキブリが死んだふりして逃げにけり
木木揺らし路地吹き抜ける秋の風
いらだってバス待つ真昼白扇子

A 5 判

輪島

定梶じょう

秋来ぬと目に電柱の足掛かり
老い先や置けば影添ふ新松子
A 5 判横綴じ燈下親しめる
雁わたる貨車の連結旗をふり
露の世のひとに褒貶びつこの犬

所 沢 須賀敏子

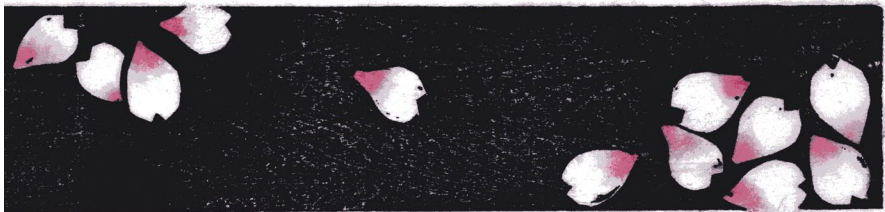
上野より鶯谷へ秋日傘
愛犬が生甲斐なのと吾亦紅
荷の中に旭川市のななかまど
松虫草雁ヶ腹摺山雁未だ
句を作る時はいつでも夜なべ妻

本三西 鈴木多枝子

苦瓜が庭で出来たとメモ入れて
炎天に手拭濡らし地引網
茅花原逝きたる人に逢へさうな
胴乱に秋果なんぞを入れてあり
彼岸花咲いてる墓を洗ひけり

梅干の蓋ずれてゐる扇風機
 田草取る人を見てゐる坐る牛
 土間すこし汚して燕かへりけり
 米櫃に米あり敗戦日の正午
 「浜長」に草履も靴も祭かな
 喜雨来たりいきほひ余り水攻に
 病院を出て目にしみる緑かな
 永眠を告げずに居りし敬老日
 白桃のしたたり久に姑思ふ
 馬鈴薯が大皿に居座つてをる
 朝早きパン屋の戸口蟬の殻
 稲妻に一瞬闇の動きたる
 夏空や泰山木に花のあと

佐藤喜孝
 鈴木多枝子
 竹内弘子
 田中藤穂
 東 亜 未
 長崎桂子
 早崎泰江
 堀内 一郎
 森山のりこ
 森 理 和
 山莊慶子
 吉成美代子
 吉弘恭子



船虫の巖剥ぐごとく群れて逃ぐ	渡邊友七
国威とは厄介なもの遠花火	赤座典子
秋曇血圧だけをほめられぬ	安部里子
かなかなや養老院の早夕餉	遠藤実
梅 春雨のそは降る日、義母と妻を伴って唐招提寺を訪ふ 白し和上の結ぶ誼かな	王岩
白玉は白砂糖でとははごのみ	鎌倉喜久恵
方丈の二間くまなく秋灯	木村茂登子
空蟬のあまた揺れをり一本百合	斉藤裕子
生身魂慌ててズボン穿きにけり	篠田純子
朝顔の紺のいち輪終戦日	芝尚子
暮れ泥む無人の校庭蟬時雨	芝宮須磨子
新聞が開きっぱなし夕風ぎて	定梶じょう
小さき手しっかり握り夏まつり	須賀敏子

喜孝 抄



十月作品より

田中藤穂・佐藤喜孝

カップ麺あてがふ文庫歳時記秋

佐藤喜孝

カップ麺に熱湯を注いで出来上るのを待つ間、蓋がぴたりとくつつくように、傍にあつた文庫本を乗せあてがつたのか。偶々その本が歳時記の秋の巻だという。咄嗟のたまたまのことだが我ながら微笑が湧いてくる。歳時記には「ごめんなさい。」

喜孝氏はいつも何か新しい句を工夫し、面白い句を見せて下さる。深すぎて時々私には難解なこともあるが、これまでにない句に出遇えるのはとても楽しいことです。

茅花咲く野原を過ぎて九十九里

鈴木多枝子

とても広大な気持ちのよい句ですね。茅の花が一面に咲いている野原を過ぎたら、眼前にぱっと広がった九十九里の春の海、作者の楽し

い気持ちと風景が伸び伸びと詠まれている。

土間すこし汚して燕かへりけり

竹内弘子

土間すこし汚してというところに燕に対する愛情がよく出ている。

何処かの岬で帰燕の群を見た。沢山の燕が四方から岬鼻の上空へ集まってきて、その鳴き声の賑やかなこと。それはやがて一つの大集団になったかと思うと、海上へ向かって飛び始めた。最後尾が海上へ出るまで暫くの時間があつたと思う。チイチイピイピイ鳴き騒ぎながら飛んでゆく大集団を見送りながら、あの小さい鳥が、広い海原を越えて目的地へ着くまでの無事を心から祈ったことである。

永眠を告げずに居りし敬老日

堀内一郎

仲間の人々が亡くなったことを知ったのだ

が、今日は敬老の日、せっかく長寿を祝われている高齢者の方達にそれを知らせるのは心ないことだ。今日言うのは止しておこう。

作者のこまやかな優しさが滲み出ている、いつそう物哀しい気持ちがある。

空の色深めて蜻蛉ふえにけり

吉成美代子

おおらかな詠みぶりだが深みがあります。深めて……ふえにけりが、実感がいい句だと思います。

夏空や泰山木に花のあと

吉弘恭子

泰山木の花は、開くともう翌日にはあの白い大きな花が茶色くなって、バラバラッと一気に散ってしまう。そのあとに白い芯が残って、それが秋には大きな赤い実になる。

泰山木の木の下に立って見上げたら、その白い芯が見えたのでしょう。その上に青い夏の空が広がっていたのでしょうか。素直に詠まれた佳句です。花のあと、は発見。

船虫の巖剥ぐごと群れて逃ぐ

渡邊友七

実景を適格にとらえていると思います。船虫はなぜあんなに一緒に群れているのでしょうか。足が近づいてゆくと一齐にぎざざと移動して逃げるので、足元が崩れるような錯覚を覚えます。刺しもなにもないけれど、あの色も形もとても好きになれません。

家主われ八月生れ獅子座なり

木村茂登子

独居という題である。家主われという云い方でそれを表現している。八月生れ獅子座なりと、怯んだところが全くない。茂登子さんは傘寿に近いお年だが実に逞しく独り暮らしを営んでいらつしやるようだ。日本中に独居老人は四百万人を越すことが何時か新聞に出ていたが、その暮し方は一人一人違うと思う。私もその一人だけれど、一人は淋しいこともあるし不自由なこともあるけれど、健康な限りこの束縛のなさは貴重だと思う。しのび寄る老を考え

ないわけではないが、力の限り明るく頑張らねば、というのが、独居老人の共通の気持ちだと思ふ。うなだれたらおしまいです。さあ胸を張って！につこり微笑んで！茂登子さんは私にとつて頼もしい仲間です。

新涼の川の芥に夏みかん

篠田純子

善福寺川緑地に吟行したのは八月の十七日でしたが、前日までの猛暑が嘘のように涼しくなつて、樹木の多い川の辺りは新涼の気が満ちていました。

覗き込んだ善福寺川の真中に芥がかたまつて浮いていて、その中に黄色い丸いものがありました。少し眼の悪い私は、ゴム毬かしらと思ひながらじつと目を凝らすと、それは夏みかんでした。あの鮮やかな色が今も眼に浮かぶようです。

生は死と同じ数だけ蟬の穴

芝 尚子

なるほどまさにその通りです。でも蟬の穴を

見ながらここまで考えの拡がるところが凄い。

この句を“生と死は”或いは“死と生と”“死と生は”としたらニュアンスが違つてきます。

“生は死と”と生を前面に押し出したところが肯定的で、そうだから死ぬまではしつかり生きなければという元気が湧いてきます。この句は尚子さんの人生のキャリアを感じます。

暗闇に固まってゐた八月六日

芝宮須磨子

八月六日は広島に原爆の落とされた日です。暗闇に固まっていたのは何だったのでしょうか。

八月六日の後、徐々に伝えられた報道で知つたあの日の悲惨さ、暗さ、恐怖、絶望感、いろいろなことが蘇つてきて、とても恐ろしい一句です。長崎桂子さんに“セピア色にしてはいけない敗戦日”という句がありました。戦争を体験した私達には、決してあの戦争がセピア色になることは無いでしょう。

尺蠖の歩行は本質的であり

定梶じょう

尺蠖虫の歩行は全身を屈伸してひたすらに前進する。ただひたすらに……それに比べて人間や尺蠖虫以外の生き物は、なんと気まぐれな、複雑な、時に老獪な動きをすることか、とじょうさんは思っているのだろうか。本質的なものが歪んできたこの頃の世の中、考えさせられることが多々ある。

(田中藤穂)

「浜長」に草履も靴も祭かな

東 亜 未

「浜長」は知らないが名称に割烹店のやうな雰囲気がある。芭蕉の「木本^{このもと}に汁も膾も櫻かな」の本歌取り。

この店は大店ではなささうだ。上り口に履物が乱雑にとまでは云はないが脱ぎ散らかしてあるのだらう。雑多な履物の有様を何も言つてはゐないのだが祭の雰囲気は伝はつてくる。祭の賑はひを独自の視点で簡潔に捉へてゐる作品。

白桃のしたたり久に姑思ふ

森山のりこ

人は不思議なもので何かのきつかけ、たとへば沢庵を噛むつもりが口中を噛んだとき、道を歩いてゐてふと夕餉の匂ひが漂うてきたときに、故人を思ひ出すことがある。作者は久しくお姑さんのことを忘れてゐた。剥いてゐる白桃の汁がかひなをつたふそのとき姑のことがよみがへつたのだらう。素直な表現で好感を覚えた。白桃はお盆のころよく見かける。

かなかなや養老院の早夕餉

遠藤 実

養老院とは「主に身寄りのない高齢者を保護する施設のこと。一九六三年に老人福祉法の制定により「老人ホーム」と改称された。」とある。

掲句は多くを語らずして養老院の静かさ、淋しさが表出されてゐる。拙句に「老人ホームの父や母たち夕かなかな」「青寫眞」があることを思ひ出した。三五年前近郊の山を下りてきた折の作である。

朝夕の薄暗い時間に鳴く蛸は聞く者にとって
は淋しさがつるるびきである。(佐藤喜孝)

近世俳諧と漢詩文 拾参

王岩

臥看牽牛星

腹におく帯一すじや天の川

留 倫

留倫は江戸時代中期の俳人で、生没年未詳。別号に留倫や無極庵などがある。この句は『果報冠者』（閑鵝編）に見え、句前の「臥看牽牛星」は『三体詩』の王建七言絶句「宮詞」の結句から織女を省いて得られた句題である。

銀燭秋光冷画屏、銀燭 秋光 画屏に冷やかなり

輕羅小扇撲流螢。輕羅の小扇 流螢を撲つ

玉階夜色涼如水、玉階の夜色 涼しきこと水の如し

臥看牽牛織女星。臥して看る 牽牛 織女星

「宮詞」とは、宮廷のことや宮女などを詠む七言絶句で、王建的宮詞百首がその元祖といわれる。因みに『聯珠詩格』巻九にはこれを杜牧之の作として載せている。

この「宮詞」詩は、秋の長夜に団扇を手にした宮女が、所在なげに流れ飛ぶ蛩と戯れながら、横たわり、彥星と織姫星を眺めやるといふ、寂しさを漂わす艶な姿を描いている。

「臥看牽牛星」という句題から考えてみると、留倫が句中にイメージした人物も女性であろう。彼女は着物の帯を解いて腹部に細長く置いたまま懶げに横たわり、銀漢を眺めやつて彥星を捜している。作中人物は唐の宮女から近世の和風女性へと変化させ、春情にけだるく包まれた若い女性の面影を想像させる。



あをかき集

竹内弘子選

(六人目以降五十音順)

鉄棒にぶら下る子の夏終る

鎌倉喜久恵

山門の仁王の肩になめくじら

芋の露いびつのままに零れけり

句会果て椅子ひく音やそぞろ寒

渡されし釣銭かすかサンマの香

蒔絵師の筆が微に入る厄日過

定梶じょう

この屋にも螻蛄鳴く夕刊配りかな

ちんちろりん智慧の輪のもう解けさうで

地にとんで出て馬鈴薯のこのでこぼこ

鯛雲町の高処の鳥居かな

稲妻をおそれぬ妻となりしかな

渡邊 友七

鬼やんまもんどり打って西日散る

水底にわが貌炎ゆる曼珠沙華

書を積むも濁る一眼秋の夜

せせらぎにみのり田の黄と唐辛子

猪に喰はれず栗はモンブラン

森 理和

古里の栗の温もり息づかひ

雨多し産直の生落花生

本買ふか飯を食はうか昼の蝨斯

篠田 純子

菜箸に綸のありなし秋淋し

お姉さんと声掛けらるる市さはやか

じゃれてゐる赤子の眸萩の風

青無花果ふいに少女に戻る母

うら表なき地球儀や秋深む

吉弘 恭子

遠ち方の空のもみちもさくらかな

日だまりへするするうごく散紅葉

竹垣のうしろに水道もみち散る

いつの間に拾ふてをりし銀杏の実

海水の濃度に茹でし落花生

水入りも無し三日目の九月場所

スポーツ紙の大きい見出しや鵬の声

猫飼えばと娘に言はれ秋夕焼

双方向の老老介護九月尽

尻取りに食べ物多し秋の昼

鉄棒の役目終りし秋の庭

秋の庭行き交ふ人の傘傾げ

大空の一筆書きか昼の月

リハビリの靴の片減り月の暈

後の月厨でグラス割れる音

ビールより一献と云ふぬくめ酒

校庭に九月の声の弾みけり

別の名を齡草とふ菊の花

プラモデルかと子が見詰めゐる甲虫

剪り取れば風にも耐へぬ芒かな

芒野は黄泉路のごとし月なくば

芋虫ふえ食糧難がベランダに

赤座 典子

ベランダに異常発生青芋虫

芋虫の大移動せるベランダを

白壁の蝶の蛹に金ボタン

はちまきの長髪少年秋祭

新蕎麦の品書しるき墨の色

長生きも藝のうちとや法師蟬

心覚えはすぐ薄れゆき秋の虹

秋まつり果ての直会三拍子

青空に向かい半月爽気かな

折れ口に老どち集ふ秋の雨

秋の雨塩原と決め手配する

田の色の豊かに変はる九月かな

所沢二分歩けば虫すだく

カーナビを頼りに目指す走り蕎麦

水道栓ポトリポトリと九月の夜

篠懸の木迷彩色で整列す

父の好みし蕎麦の実のいま盛りなり

もう一度新蕎麦打って供へたし

安部 里子

芝宮須磨子

芝 尚子

遠藤 実

須賀 敏子

木村茂登子

鈴木多枝子

斉藤 裕子

倒れさうで頑張る秋の斜塔かな

チーズに刃入れ初秋とおもひけり

聖火消え北京更待月かかぐ

見つつ過ぐ猿の腰掛一人旅

掛蕎麦や十五夜さまはすぐ雲に

干しものの日がな一日花薄

新調の法被鉢巻松手入

蟪蛄の居丈高ともゆるやかとも

秋の風子供二三歩前をゆく

虫の声暮れがた軒の立ち話

虫しぐれ自転車に塾帰りの児

大雨の残してゆきし蔦あをし

秋夕べ行き合ふ人の皆漫ろ

食卓に錠剤並べ秋はじめ

秋雨や頬杖つきて何もせず

気が付けば空蟬ばかり残りけり

糲殻の燻る煙やおだやかに

住職の変わらぬ美声酔芙蓉

田中 藤穂

カラフルな杖送らるる秋桜

秋の電車窓に拝む大観音

木犀の香に導かれ路地曲る

東 亜 未



本買ふか飯を食はうか昼の蝨ス 篠田 純子

お姉さんと声掛けらるる市さはやか

長崎 桂子

東京の人にありがちな、学生気分の抜けないご主

人さまと一緒に場面を想像しました。この一行はご

主人さまの発したものと思われます。男の口調です

ものね。「昼の蝨ス」もいいです。一皮も二皮も剥

けたような感じですよ。

夏のころ、黒いスパッツに似たパンツにレースを

あしらったブラウス、赤の混ったネックレスを付け

た純子さんはすてきでした。

森山のりこ

『お熱いのが好き』のジョージ・ラフトの愛称がスパッツです。渋い名脇役でした。

うら表なき地球儀や秋深む

吉弘 恭子

「地球儀」の方が地図より、方位・面積・距離など正確だそうです。地図を辿るのは容易ではありませんが、地球儀は指の先で自在に回転させることができます。子供が小学生のころ、教材で使った水色の地球儀を抱えて帰ってきて、一緒に見たことを覚えている。

地球儀に「うら表」がないことを、はじめて知らされた気がして新鮮でした。

芋の露いびつのままに零れけり

鎌倉喜久恵

大きな芋の葉のあちこちに露が溜って、葉がうごく和小さい露と露が合わさって一つになったり歪になったりするのを、倦かず見ていた覚えがある。

へ芋の露連山影を正しうす 飯田蛇笏

地にとんで出て馬鈴薯のこのでこぼこ 定梶じょう

むかし子供を「凸助」と呼ぶ漫画があった。人を貶しめるような「でこぼこ」というのも、たわいない戯れ言葉だと思う。茎を引くと、大小みごとな馬鈴薯がつぎつぎと「地にとんで出る」「このでこぼこ」である。

稲妻をおそれぬ妻となりしかな 渡邊友七

雷鳴と同時に「稲妻」が突刺すように襲いかかる。音と光の近いのが怖いことは、以前住んでいた所の近くの電柱の変圧器に落雷したことで体験しましたが、いまでも怖いです。

内田百閒は大の雷嫌いで、外出先の会食など人前でもさつと顔色が変わったといいます。

心覚えはすぐ薄れゆき秋の虹 芝 尚子

文字どうり心に覚えておくことですが、覚えてたつもりがいつか薄れ、忘れてゆく。「心覚え」という言葉、いいですね。わたくしのばあい、紙切れに書いてバッグに入れたり、てのひらに書いたりします。が、そうしたことしたい家に帰るころには忘れていきます。心ばえ、心急く、等、典雅な言葉遣いはいいものです。

ビールより一献と云ふぬくめ酒 遠藤 実

季節柄「ビール」より「ぬくめ酒」ということでしょう。一杯が転じて一献になったそうです。室町時代以後の礼法で、客に着を添えて酒を三杯すすめること。酒宴などにおくれて来た人に「駆付け三杯」というのはその名残りのようです。

剪り取れば風にも耐へぬ芒かな 木村茂登子

日当りの良い山野のいたるところに自生する「芒」は、風が吹けば一斉になびく。海原の大波のように

強靱に見えるのに、その中の一本を剪り取ってみれば茎は細く、わずかな風にも耐え得ない風情だというのである。

へをりととりてはらりとおもきすすきかな 蛇笏

折れ口に老どち集ふ秋の雨 芝宮須磨子

折れ口＝弔いのこと。作者は中野にある有名な寺院の門前でご商売をしておられる。

折から秋雨の中を三三五五人が集ってくる。老人は何につけ集るのが早い。傘はさしていても何れかの軒に雨を避けておられるのでしょう。

所沢二分歩けば虫すたく 須賀敏子

浦和の白幡に住んでいる長女の二人の子は、所沢の駅前の集合住宅に居た頃生れた。西武池袋線でよく手伝いに行ったものだ。西武ライオンズの選手も住んでいたようだ。松坂選手が横浜高校から西武に入って、等身大の看板が立っていた頃だ。あれから

10年余り経ったけれど、二分も歩けば虫が鳴いてい
ると思う。

父の好みし蕎麦の実今が盛りなり 鈴木多枝子

父上は「蕎麦」のよく穫れる処の方だったのでしょ
う。花も真つ白くきれいなので、殊更「蕎麦の実」
といったのが蕎麦処の人らしい。「もう一度新蕎麦
打って供えへたし」との句も佳いと思いました。

聖火消え北京更待月かかぐ 田中藤穂

「臥待月」よりなお遅れて出る「更待月」。さしも
の満艦飾の北京オリンピックのドーム（鳥の巢）も、
夜空を圧する色彩の渦も、聖火の消えるのを合図に
一城の夢と消えてゆきました。

秋の風子供二三歩前をゆく 東 亜 未

何でもないような句ですが、小さな子の少し後を
歩いて行くわけです。子供とその子の周囲を視野に

入れて歩くのです。子供は、したがって二三歩前を
行くようになります。

大雨の残してゆきし蔦あをし 長崎桂子

この夏は日本中の各所で旱が続き、また豪雨や洪水
があった。旱で息もたえだえに葉を重ねていた
「蔦」が「大雨」で生き返った。

わるいことばかりはないと思いたい。〃旱天の慈
雨である

粃殻の燻る煙おだやかに 早崎泰江

刈田に「粃殻」の小山をつくり、ボール紙の細い
円筒を立てて下から火をつけると天辺から煙が出て
粃殻を焼く匂いが漂う。燃え上らない。穏やかに燻
りつづける。なつかしい風景だ。

住職の変らぬ美声酔芙蓉 森山のりこ

ずっと以前『暖流』の支部句会がひらかれていた、

谷中長久院の「住職」橘澄男氏は美声であつた。幼時から御尊父について勤行を続けて来られたからでしょうか。

のりこさんは谷中句会の先輩でしたので、澄男氏のことかと思ひました。そういえば、長久院の御門の酔芙蓉が咲いている頃です。

海水の濃度に茹でし落花生

森 理和

「落花生」のほどよい塩気が、海水の濃度とおなじとは知りませんでした。食べ物屋さんに入ると、ぬれたおいしい落花生が小皿について、帰ってから探しましたが似て非なる味でした。本場だからこそ味と解りました。

猫飼えばと娘に言はれ秋夕焼

赤座典子

娘は、慰め顔にいろいろ言ってくれるからいいですね。仔猫が走り廻っているのは可愛らしいけど、すぐ大きくなります。友人の所へたまに行くとき二代

目の猫がいて、マンションの五階ですからママと一緒にでないといふと外へ出られなくて部屋の隅にデーンと伸びています。

尻取りの食べ物多し秋の昼

安部里子

食べ物の尻取りというのをいつの時代の子供もやるようです。つかえているのでヒントを出すと「いわないで！」とおこられます。



九月の句会

傳

中野区 カフェ傳

飛ぶ鳥の脚の始末よ秋の艸
県庁の夕日の窓に荔枝かな
しり取りの食べもの多し秋の昼
虹が顕つ火事の黒煙包みこみ
鎌切にをがまれてゐて近よれず
チーズに刃入れ初秋とおもひけり
雷尽きて小さき秋の来たりけり
日日の些事に順番新酒酌む
本買ふか飯を食ふかで昼のぎす
東口二分歩けば虫すだく
露けしや朧ぬれてゐるやうな
冷さうめん二階へ声をかけてくる
玫瑰や老人施設の窓の数
軒低く古りし居酒屋秋刀魚鮨
喜孝 敦子 里子 寒林 尚子 藤穂 典子 喜久恵 純子 敏子 恭子 弘子 綾子 理和
白ふきん掛け大笹の衣被
がらがらと壊れゆく母青無花果
藤穂 純子

調

さいたま市岸町公民館

赤のままコップにさせば清貧めく
新走外掛よりも内掛好き
目つむるも金の芒の中にをり
秋の昼腰掛けて誰待つとなく
打掛けの裾濡れてをり菊人形
あを吟行会
弘子 喜孝 友七 綾子 敦子

休会

七座句会

中野区・小川苑

観音とマリアは似たり草の花
夏終る人形焼に餡すこし
寝転んで少し近づく星月夜
敬老の日孫の数だけメール来る
苦瓜が庭で出来たとメモ入れて
秋祭少年に鬘生えそめし
まんまるの月の哀しみわがかなし
長靴の為に九月の水溜
少女期は夢のごとしよ花芒
源氏より清少納言吾亦紅
少年に凭れ電車に昼寝かな
純子 喜孝 理和 須磨子 多枝子 藤穂 尚子 東亜未 綾子 夏子 恭子

連句勉強会 毎月第1日曜
希望者は 佐藤喜孝まで
(090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜
カフェ傳 森 理和
(03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜
岸町公民館 竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会 第3日曜
哲学堂 佐藤喜孝
(090-9828-4244)

七座句会 毎月第4火曜
小川苑 吉弘恭子
(090-9839-3943)

あを吟行会のお知らせ

吟行地 哲学堂 中野区松が丘一丁目34番

日時 12月21日(日) 午前10時半

集合場所 中野駅南口

交通

句会場 霊明閣(公園内) (3951) 2515

申込み〆切 12月20日

申込先 佐藤喜孝 090 9828 4244

句会場は九時より使用出来ます。昼食各自持参して下さい。

今号の短冊は長谷部朝子氏。『暖流』の才媛であつたが道半ばにして逝かれた。句中の『ぼく』は子息の公連君であらう。今俳誌『滞』で活躍してをられる。朝子さんの作品を読むと、傍にゐて彼女の才能の一端しかみえてゐなかつたかと忸怩たるものがある。少し冬の句を抄

してみます。(喜孝)

冬將軍の革靴を見しハマ昏るる
糊の香の文もて急ぐ冬蓬
山茶花の酔へるがごとく舞ふごとく
究極のあかりとなりぬ石路の花
冬めきし古墳の息の漂へり
元旦の塾の梅干し弁当かな
雲かげか流水なるか枯木原

御芳志深謝

森 理和 様

二〇〇八年十一月号

発行日 十一月三日

発行所 東京都中野区中央2-50-3
電話 090-9828-4244

印刷・製本・レイアウト

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替 00130-655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。

佐藤喜孝
竹徳房

「あを」入会ご希望の方は下記まで。

自選作品は5句（作品により添削あり）

「あをかき集」は7句投句。

普通会员 10,000（年間）

インターネット会員（冊子無し）

5,000

連絡先

satou.yositaka@rouge.plala.or.jp



Café 傳

中野区上高田 1-1-1

03-3368-4263